



巻頭言

水 田 と 水

(財)日本植物調節剤研究協会 専務理事 小澤 啓男

一昨年の大冷害が一転して、昨年は干天続きの猛暑で、すべてにおいて「水」の有り難さを嫌という程、味合わされた。

我が国は有数の多雨地帯であるアジアモンスーン地帯に位置しており、春の「ナタネ梅雨」1か月近く続く「梅雨」、秋雨前線の停滞する「9月の長雨」など雨の機会は多く、水資源に恵まれていると誰しも思う。国土庁編集の水資源白書によると、昭和36年から30年間の年平均降水量は1,730ミリで、これは、世界平均の約2倍に当たり、やはり多いと言える。ところが、人口1人当たりで換算してみると、世界平均値の5分の1に過ぎず、諸外国に比べ必ずしも豊富とは言えない。更に、悪いことに我が国の地形は急峻で、河川の流路が短く、集中的に降る雨は洪水になり易く、貯水施設が十分でないことでは、常に水不足の不安にさらされている。

我が国の水の使用形態は、農業用水、工業用水、生活用水とに大別され、2割弱の生活用水に比べると農業用水は6割を越え、はるかに多い。農業用水はすべて水田で利用しているわけではないが、上手に使えば再度、活用できる面を持っている。治水の不十分な一昔前、自然との戦いは水との戦いであった。長雨が続きと水田の流亡を守るために、川岸に濡れそぼって佇む農夫の姿があった。水は無くてはならないものであると同時に、怖くて、恐ろしいものでもあったのである。

農村という集落の中では協調性が最も重要で「村八分」と言う私的制裁があり、「田んぼに水をやらない」と言われればもう生活の場を失

ったも同然であった。農家は、このように水を大事にすると同時に「水田は土壌が在って水が在る」と土壌を大事にした。水を得、土壌を失わないために、対岸同志、上流と下流、隣接田同志などで、醜い争いもいくつか生じたが、農民の心情は一つであった。

水田1ヘクタールの水利権は1日約200トンと言われている。水田の代掻きは、ある水深をもって行われる。田植作業のために、この水を落水するのを良く見聞きする。代掻き後、間もないから、濁り水である。とすると、この排水中には10アールで約1トンの土壌が含まれると言われる。言い換えれば、水田の一番優れた表層土が1トン消えて無くなることになる。

「土を大事にし、水を守る」農民の基本精神も時を経て、護岸工事もほぼ整い洪水の心配も薄れたし、栽培管理も農業機械の操作を意識するようになってきた。また、米の生産自体も調整されるようになってきた現在では、徐々に希薄化してきたのは止むを得ないとも思う。しかし、水と上手につき合う気持ちだけは失ってはいけない。水田にとり、水口からの灌水の重要さと共に、不完全な畦畔からの漏水や、排水が他に及ぼす影響について良く認識して欲しい。

水田はダムである……との説がある。正に、その通りだと思う。その機能を充分、良い方向に生かすために、水稻栽培農家は、いったん、取水し利用した水を再び有効に利用できるように、利用痕跡を最少にして、一般河川に帰すよう努めなければならない。「水田は自然のダムである」と言われるためにも。